第１回日本茶・宇治茶の世界文化遺産登録検討委員会（概要）

日　時：平成２４年８月３日（金）１０：００～１２：００
場　所：京都平安ホテル　２階　白河の間

１概要

〇提案コンセプト等の更なる検討について

・資産の名称については、今後の議論を踏まえて、世界遺産の評価基準を意識して再度検討する。

・現在の提案コンセプトには無形の要素も多い。コンセプト・構成資産候補がどの評価基準にどう寄与するか整理して検討する。

・お茶は世界中で飲まれており、世界の中の日本茶の位置付けを明らかにする必要がある。

・宇治と京都との関係、都市と周辺の茶園の関係について、宇治が独自の場所にあったことの説明が必要。

〇今後の進め方について

・評価基準と構成資産との兼ね合いにポイントを置いて検討を進める。

・チーム外の有識者の助言も得て、世界遺産の評価基準を意識して構成資産を検討する。

・「文化」と付く概念（日本茶文化・喫茶文化・茶の湯文化・緑茶文化など）について、海外に説明できるようにそれぞれの意味を整理する。

２　主な発言内容

■あいさつ

〇京都府

・世界遺産登録を「未来戦略プロジェクト」として位置付け取り組んでいく。

・今年11月に京都で開催される「世界遺産条約採択40周年最終記念会合」に世界遺産に係る専門家等が国内外から参集するので、「日本茶・宇治茶」をはじめ、京都府が登録を推進する資産の魅力を発信したいと考えている。

・世界遺産登録は一朝一夕に達成できるものではないが、関係者が一堂に会し、その意義・重要性の認識を新たにし、国内外に示すことが重要と考えている。日本茶・宇治茶の世界遺産としての価値付けを更に深めていくために、皆様のご協力をお願いする。

■知事への提案について（報告）

・平成24年5月25日に金田委員長から知事へ昨年度の検討結果を報告

■検討委員会設置要綱の改正について（報告）

・会の名称から「可能性」を削除し、「登録検討委員会」と改正した旨を報告

■提案コンセプト等の更なる検討について

〇委員長

・資産の名称については、今後の議論を踏まえ、再度この委員会で検討することになると考えており、世界遺産の評価基準を意識して検討する必要がある。

・日本の文化財と世界遺産の評価基準との間には若干のずれがあり、お茶については世界文化遺産の登録対象である不動産だけではなく、無形の要素を持っていることがずれの典型的要素。茶室・茶商等が一カ所にまとまっていないということも基本的事実で、シ

リアル・ノミネーション（複数の連続していない地域を含む遺産の推薦）の概念を考えることも重要。

○学識委員

・喫茶文化と一般的にいわれるが、日本の茶道、茶文化は喫茶という表現だけでは十分でない。世界の茶文化との相違は、点茶であり、そこをも強調すべきではないか。

○学識委員

・提案書をみると、無形的な要素が多い。今、評価基準は２・４・５としているが、無形的な要素は６が適応するのではないか。２の適応については、国際的な文化の交流、茶の湯であれば伝来のルートなどから入っていくべき。コンセプト・構成資産候補がどの評価基準にどう寄与するか整理してはどうか。資料５－２については、イコモスではかなり否定的な議論もされているので、イコモスの勧告でどういうコメントがあったか付け加えてはどうか。

○学識委員

・お茶は世界中で飲まれており、世界の中の日本茶の位置付けを明らかにする必要がある。特に緑茶文化圏である中国との関係について整理する必要がある。もともと中国から入ってきたものを、日本の風土の中で発展させていったということをみていく必要がある。
・景観的なことは、牧ノ原とか知覧には勝ち目がないが、景観だけでなく文化的な側面について検討を進める必要がある。
・なぜ宇治なのかという答えが出ていない。宇治と京都との関係、都市と周辺の茶園の関係について、宇治が独自の場所にあったことの説明がないように思う。
・構成資産については、文化財が横並びで挙げてあるだけで、どういう意味があるのか。京都のお茶が持つ意味は、権力者だけではなく市民にも広がった、都市文化として生まれてきたという認識が必要。その中で生活文化として独自の内容を持つものになったということ。事実説明だけで意味づけが足りない。茶の湯を知らない人に理解してもらうのは難しいのではないか。
・地球的な視野から日本へ焦点を当てる、その中でさらに京都・宇治に焦点を当てるという手法がないと、いきなり宇治の話をされても、他の国・地域の話をされたらそれで終わってしまう。技術的には日本的風土の中であらゆる技術革新をやってきたこと、お茶が生活文化であるということは、単にお茶を飲むだけではなく、建物・家財・道具・人間関係など総体として茶の湯文化が成り立っていると説明しないと外国人には理解してもらえないのではないか。

○行政委員

・お茶とワインやコーヒーとの違いは文化。日本人のおもてなしの心だと思う。お茶はおもてなし、助け合い、思いやりの心だと思う。単なる飲み物ではなく、そういう違いを大きく特徴付けていくことが大切ではないか。

○行政委員

・心の文化、茶道の「道」が日本に受け継がれているものだと思う。「道」というものをこの中で主張していけば、世界の茶文化と日本の茶文化の違いが出てくるのではないか。

○学識委員
・世界のお茶という中で、日本のお茶はどう位置付けられるかということだが、緑茶は日本なりの大きな技術革新が起こって発展してきた。中国との違いは、向こうは釜入り茶で、分類上も異なっている。文化的にいうと、緑茶文化と紅茶文化に分けられ、緑茶文化は日本に代表されるとされている。その原点にあるのが宇治茶であると考える。京都の茶園の代表的なものは覆下茶園である。世界では被覆栽培をしているものはなく、すぐれた高度な技術である。
・京都と宇治の距離については、地図上で見ると遠く感じるが、かつては巨椋池があって水上交通が発達していた。宇治からお茶が運ばれ、京都から屎尿が入って、循環農業が成り立っていた。このような観点からも検討してみてほしい。

○学識委員
・宇治茶においては、消費まで含めて考えていることが大切だと考えている。

○学識委員
・お茶は日本人の長寿の基になっている。宇治茶のいいところをピックアップしながら、健康も文化だと思うので、その辺りもうまく入れられないかと思う。

○学識委員
・宇治茶は飲んでもらって感動を与えるものであり、他産地とは大きく違うもの。

○行政委員
・日本茶・宇治茶の特色を考えると、無形の要素が切り離せないということがあると感じる。一方で登録は有形のみで目指すという方向のようだが、無形的な要素をどうやって説明ができるのか疑問に感じる。
・歴史のすばらしさはそのとおりだと思うが、この文化をどうやって守っていくのかを考えなければならないのではないか。

■今後の進め方について
○委員長
・本日のご意見を踏まえ、評価基準と構成資産との兼ね合いにポイントを置いて検討を進めていただきたい。
・各チーム内だけでなく、チーム外の有識者の助言を得ながら進めていただきたい。その際、世界遺産の評価基準を意識しながら構成資産を考えていただきたい。

○学識委員
・各チームでは十分成果を出されていると思う。議論をさらに深めながら、内容をそぎ落としていってはどうか。

○学識委員
・「文化」と付く概念（日本茶文化・喫茶文化・茶の湯文化・緑茶文化など）については、それぞれの中身を整理し、かつ、海外の人に説明できるようにするべき。

（以上）